

苗族の正月風景

― 来訪神と祖先祭祀 ―

鈴木 正崇

一、地域と民族

中国の少数民族である苗族（ミャオ族）の正月のあり方を来訪神と祖先祭祀を中心として、その由来や伝承を考察する。苗族の人口は、約八九四万一一六人（二〇〇〇年現在）で、中国国内では貴州省、雲南省、四川省南部、湖南省西部、湖北省南部、広西チワン族自治区西部などに居住し、全体の約半数を貴州省内のミャオ族が占める。中国の少数民族としては、壮族・満族・回族に次ぐ四番目の人口を持つ。言語はミャオ・ヤオ語派のミャオ語であるが、湖南省西部のコーション（*qo xiong*）、貴州省東部のムー（*mhu*）、貴州省西部と雲南省のモン（*hmg*）の各々の自称を持つ三つの方言集団に分かれている。本稿で取り上げるのはムーである。なお、国外の苗族は、モン系統で、ベトナム、タイ、ラオスなどに居住する。生活の基盤は、山間盆地や河谷平野、山地斜面の棚田での水稻や雑穀・野菜などの農業が主体だが、かつては狩猟や焼畑耕作を営んで山間地帯を移動していた。

二、正月

苗族の新年の日は、標高の高低に応じて異なり、旧暦一〇月頃の収穫に合わせて村ごとに決めていた。これが苗年と呼ばれる年越しである。現在では暦の正月にあたる春節に行われることも多いが、春節への移行は漢化の現われでもある。貴州省の黔东南では、旧暦一〇月の寅の日に豚と鶏を殺し、卯の日に糯米の餅つき、辰の日は祖先祭祀で丸餅と殺した豚を祖先に捧げる。乳房の部分が最も神聖とされる。早朝に銅鼓を叩く所もある。祭りの三日間は男が料理を作り、女性は料理を作らない。一〇日間ほど祭りが続き、蘆笙舞が数日間行われる。大地の神に感謝し、糯米飯を食べて祝う。祝いの日に糯米は欠かせない。苗年には御馳走と紙銭と酒を家の中の楓香樹の柱、先祖の柱に供える。この木にニャンコン（正月爺さん）が収穫を祝いに下りてくるとされるので、苗年はノンニャン（爺さんを食べる）といい、爺さんの化身である餅を食べる意味だと伝える所もある。餅をつく白や杵は全て、宇宙の創世時に生えていたとされる楓香樹から作るのが、元来のやり方であった。

広西壮族自治区では春節の正月が多い。融水苗族自治県の安泰郷培地村では旧暦正月元日は女性による若水汲みで始まる。糯米飯・豚肉・野菜・酸魚などの御馳走を供える。住居の中央の囲炉裏の火は、先祖が宿る場所であり、地面の上に御馳走を置いて家族が集り、酒盃を満たして祈願する。正月は、親戚の

者が各家々を訪問し、人々は大宴会で大騒ぎとなり楽しく過ごす。男性は家にある蘆笙を取り出して吹く。蘆笙は神様からの授かり物とされ、吹く時期は六月六日の新稲節から春節終了までの半年間で、それ以外の時に吹くと不幸になる、よくないことが起こるといふ禁忌がある。吹く場所は、村の中央のニンと呼ばれる広場で、カーニン（カーは蘆笙）ともいい、トンカーという柱が立っている（トンは柱）。いわゆる蘆笙柱で、突起があり水牛の角を表す。水牛は役牛で財産を象徴し、力の強いことにあやかるといふ。柱には下り龍と昇り龍が描かれる。水牛と龍は同体とされ、神話世界に由来する話が伝わる。貴州省の黔东南に伝わる神話では、宇宙の創世時に楓香樹（マンサク科の落葉樹で楓に類似）が生えていて、蝶々のメイパンメイリュウ（胡蝶媽媽）が樹木の下の水溜りの水の精と恋愛して一二の卵を生み、そこから人・龍・水牛・雷などが現われたと語られている。水牛と龍は天地始まりの時に一緒に生まれたので、共に兄弟のようであり、同一視されるだけでなく、家畜の健康祈願と水の確保と関連づけられる。柱上には鶏が造型されているが、鶏は女性の代表、蘆笙柱は男性の代表で、合わせて陰陽和合として、豊作祈願を祈る。楓香樹は村の上方と下方に植えられていて、村を守護する役割も果たす。カーニンという広場は、苗語では臍の意味のタウトウとも呼ばれている。村全体が人間の身体に見立てられ、その中心にあたる臍に世界樹である楓香樹で作られた柱がある。村は神話世界の凝結場であるとも言える。

また、柱のある広場の近くに、龍潭（苗語はオンウオン）という泉があり、雨乞いや止雨を願う。ここは村を作った時の起源の場所とされる。春節の午後に龍潭の祭りがあり、祖先や神々に対して供物を捧げて年頭の祈願をする。池の北側には龍石と呼ばれる独特の形の石があり、脇には柱が立っており、線香、赤紙、紙銭を供えて拜む。糯米飯・豚肉・鶏肉・糯米酒・酸魚を供えて爆竹で祝う。酸魚は苗語でシャーマンといい、「増加福寿吉祥」の意味をこめる。魚は結婚・新年など祝事に使用する。先祖がアウハイアウハーと呼ばれる大河の辺や海の近くに住んでいて魚を豊富に食べていたことに因むという。祭りを主催するのは、草分け筋の賈姓の血縁者が主体で、行事は村の長老の寡老、苗語でパイヤー（村父）が指揮する。伝統的衣装を着て頭に鶏の羽のニヨンコー（漢語は花野鶏）を飾るが、蘆笙柱の上の鳥と同じである。始祖が出現した卵を暖めた鳥とされる。このように、村という日常世界は、神話や伝承に意味付けられた世界の原点であり、一年の始まりは世界の創世の場で原古の出来事を再認する時でもあった。

三、来訪神—モウコウ

苗族の村々では、新旧の年の変わり目、季節の移行期には、神霊が来訪すると考えられている。広西の融水では、神霊は仮面・異装の来訪者となって出現する。安泰郷培地村では、昼過ぎに男性が蘆笙を持って広場の中央の柱の周囲に集まり、柱の下の白石の前に供物と祈願する。男性は蘆笙を吹き、外側には銀飾

りを付けて衣装を着飾った女性が円陣で左回りに踊りつつ回る。これをカーツオ（ツオは踏む）と呼ぶ。その場に、異形の姿をしたモウコウ（磨過）がウオーウオーと鳴声を挙げ、ピョンピョン飛び跳ねて出現する。その姿は、布で半身を覆い顔を隠し、布の一部を盛り上げて角を二つはやしたようにする。布は布団の上に掛ける刺繍入の覆い（遮面布）で作る。モウコウは人々に抱きついて祝福を授け、周囲の家々を訪れる。モウコウには男性が扮し、太鼓を叩く指導者が先導役で、警護役の鉄砲持ちの青年たち七〜八人が付き添う。囃し手は、太鼓一、手平鉦二、銅羅一の編成である。モウコウの数は一で、奇数が良いとされ、村の神様（ツオンノウ）で力が強い。漢語で言えは「春神」の意味である。親しみはあるが、恐い存在として畏怖される。モウコウの正体は動物で、一説には虎と言われる。猿という説もあり、耳と尻尾は、人間の祖先である猿の記念で、飛び上がる所作も類似する。更に獅子という説もあり、漢族の考え方も入り混じっている。

モウコウは龍潭の祭りにも参加し、供物の半分を頂く。他の半分は家へ持ち帰るが、「豊作飯」といい作物の豊饒が約束される。モウコウは龍潭の前を叫んで回った後に、家々を巡り歩く。午後三時半過ぎに、村の入り口の橋の袂から河原へ降り、下流に遠ざかる。村人は橋の上で見送り、モウコウは川の中にある木の所で立ち止まり、何度もピョコピョコと頭を下げて名残りを惜しむ。河原の土手を屈んで一列になって走り、突然に姿が

見えなくなつて夕暮れの霧に消える。夕方は神送りの時に相応した境界の時間である。鉄砲隊が田圃の畦に一列に並び、空に向けて鉄砲を射つ。モウコウに扮していた人々が、衣を脱いで普通の人間に戻った合図である。鉄砲打ちは手を撃ぎ、ヤーホーホーと叫んで、衣を脱いだ人々を爆竹で出迎える。モウコウを南の方へ送る。村人は川下に送るといいう方をする。川下は幼少時に亡くなった子供を葬る所である。モウコウは村人に祝福をもたらし名残を籠めつつ送り出されるが、不吉な方向に追いやられる。来訪神は、時間の更新や再生に関わるが、常に期待と排除の両義性が付与されている。

四、来訪神—マンガオ

広西の融水の安睡郷ではマンガオ（芒蒿）という仮面をつけた来訪神が正月に出現する。マンガオとは「むかしの古いもの」の意味である。解放前は、元宝山の麓の吉曼村チーマンのみで行われていたともいう。聞書による由来譚は以下の通りである。「先祖は、約三〇〇年前に安泰郷培秀村から来た。開拓者は梁姓の三人兄弟でマンガオは彼らの子孫が行う（村人の三分の二）。かつては焼畑を盛んに行い、玉蜀黍・芋・豆類を栽培し水田も多かったという。開拓当時は森林に覆われ、沢山の鳥が生息し、人間は殆どおらず、米や粟を作り、鳥や動物をとって食べ、魚とりをして暮らしていた。苦しい生活の中で、どうしたら豊かになれるかと考えて、豊作や健康を祈願する祭りを始めた。田圃のそばに草や木の葉を

集め、口と耳をつけ、老人・子供・若い人・女・男など人間に似せた人形を作り、帽子を被せ銃を持たせたり、襷褌の衣服をまとうせた。人形はリーという。田圃にリーを置くと、不思議に鳥が沢山とれ、周囲の田圃では豊作になり、置かないと不作になったので、人々はリーを尊敬し、崇拜するようになった。次第にリーは村を守護するようになる。そのうちに、人々はリーの姿を人間に代えて祀るようになつて、春節の行事となつた。これがマンガオである。リーからマンガオに変わり益々人々の崇拜を集めるようになった。誰かが病気になる、と村人はマンガオの格好をして祈願すると治る。特に、子供が病気になる、とマンガオの所に来て治してもらう。村では子供の頃にマンガオに頭をなでもらつた経験を持つものが多いという」

伝承によれば、解放後にマンガオは他の村に伝わり、春節の期間中に、それぞれ日を違えて安睡郷の幾つかの村でやるようになったという。吉曼では、稲草を人間の体に巻き付け、下はスカート状にする。出現する数は、奇数が良いとされ、九が最高で、通常は七である。構成は血縁関係で、母親・嫁・子供の三人が基本とされて、仮面を付ける。母親は年寄りて手に魚をとる笠と魚籠（竹製）を持ち、中年女性の典型的な仕事姿となる。魚とりは女性の仕事とされてきた。嫁は四〇歳以下の姿で、手に木の棍棒を持ち、子供を背中に背負う形をとる。子供は人形を使うこともある。父親が出る場合には、目が大きく、眉毛が太く、鼻が高い、歯が無い男面を使う。女面は目が細く、見た

目も綺麗である。男は女よりも色を濃くする。仮面の装飾の色は紅と黒の二色を使い、紅は植物の薯類から、黒は鍋墨からとる。墨は避邪の意味で、人々に墨をつけるのは善いとされ、塗り付けられると病気に罹らずに健康になる。仮面を作る人は、両親なし子供なしという不幸な人で、一般の家庭の人は作らない。作る時期は旧一二月で、決まりとして木は杉の根元部分からとること、雷が落ちて破壊された木は使わないことがある。七つのマンガオが出る場合は家族を構成する。若い人は前、年寄りは後に立ち、後から祖父・父・母・兄弟・姉妹の順番である。祖父はお爺さん姿で、長い杖と一米位のキセルを持つ。父親は鋤や鎌を持ち仕事をする仕草をし、男根を象る木を手持って腰部につける。女性も性器を木で象って取り付けた。地面の土や泥を男根をかたどつた木につけて沢山の人が集まっている所に放り投げる。泥が付くと子供が出来ると信じる。衣服が汚れても、特別に受ける。子供の性格が悪い時、マンガオが頭を押さえると直る。マンガオに触ってもらつて災難を避ける。マンガオは祖先を表すが、出現や消滅の場として山が意識され、山神とも観念される。参加者は男だけで、青年が主体で一八歳から二五歳位までだが、三〇歳位までは可である。マンガオに扮する理由は、自分の家の人が誰か病気になる、マンガオは良い物なので参加する、家族の者が病気になるのは自分の普段の心掛けが良くないと考え、マンガオをして治そうとする、何年間か病気が直らない時、マンガオに扮すると直るなど願掛けが多

い。午後には山から出現して、村の中央の蘆葎坪に出てくる。先導役は銅羅と皮鼓で、沢山の村人の間を回り、三〜四時間は村中を踊り巡る。踊りは、川の中から魚を捕る所作、鋤で田を耕す所作など祖先の生活を演じる。マンガオは人々に触り、お互いに抱きつく。夕方に村の後の山に消える。マンガオを演じた者は、森の中で衣装を脱いで密かに村に戻る。マンガオは、吉祥を齎らす強い力をもつとされ、人々の不幸を救い、病気を直し、悩みを解消し、豊作や多産を呼び寄せる。原郷は山という漠然たる意識がある。かつては祖先祭祀のヌーニユウ（拉鼓）が一三年目に行われ、山中で祖先の霊を木にのり移らせて太鼓を作り、山から引いてきて村に引き込んで祖先の霊を招き寄せ、村人と交流した。祖先は山に住むという観念があり、マンガオが祖先の姿と重なり合う。古いマンガオが母と嫁の組を基本とする理由の説明はなかったが、祖先を女性とする意識はあるようだ。来訪神の儀礼は祖先祭祀と連続性を持っている。

五、祖先祭祀

苗族はかつては大規模な祖先祭祀を行っていた。一三年目一度で、丑年・寅年・卯年などで行われ、一般にはナウ・フー・ナウ（牡の牛を食べる）、ナウ・チャン・ニユウ（ナウ食べる。チャンニ氏族。ニユウ食鼓、貴州省雷山県烏流寨ではノン・ニユウ（食鼓）という。苗年を巨大化したような性格があり、多くは木鼓を叩き、祖先を祀り、水牛を供犠するだけでなく、一二年間の

死霊の供養を行う所もある。改革開放後に徐々に復活し、近年は観光化に向かいつつある。祖先は神話的始祖のメイパンメイリュウ、人間の始祖のチャンヤン（姜央）とその妹という兄妹始祖、同姓同士が祀る父系親族集団の究極の祖先など多義的である。祖先の蝶々の霊魂は楓香樹に帰ったと信じられ、祖先祭祀はこの樹木で作った木鼓を叩いて霊魂を呼び覚まして交流する。黔东南の烏流寨（一九九七年）では、伝承では、祭りの時に、木鼓を作る楓香樹の木の皮を食べたとされ、文字通りの「食鼓」であった。黔南の小脳寨での祖先祭祀（一九九九年）では、山や樹木から祖先を迎えて柱やイロリで祀る。神話世界を描く「祭祀衣」を着て舞い、来訪する女性の祖先を演じる。最後に五〇頭余りの水牛を供犠して他界に送る。正月は異界や祖先との交流を通じて原初に立ち戻って、社会のあり方を再編成する時であり、人々には生き方を考え直す機会が与えられる。

参考文献

- 鈴木正崇「苗族の来訪神」宮家準・鈴木正崇編『東アジアのシャーマニズムと民俗』一九九四 勁草書房
- 鈴木正崇「祖先祭祀の変容」宮家準編『民俗宗教の地平』一九九四 春秋社
- 鈴木正崇「死者と生者」『言語・文化・コミュニケーション』（慶應義塾大学日吉紀要）二九号、二〇〇二

（すずき・まさたか／慶應義塾大学）